

■ PCN だより

PCN Volume 63, Number 5 の紹介 (その 2)

先月号では、2009年10月発行のPCN Vol. 63, No. 5に掲載されている海外からの論文について内容を紹介した。今回は、日本国内からの論文について、著者をお願いして日本語抄録をいただき紹介する。

Regular Article

1. Practice-based depression screening for psychiatry outpatients: Feasibility comparison of two-types of Center for Epidemiologic Studies Depression Scales

T. Nishiyama, N. Ozaki and N. Iwata

精神科外来患者の実践的うつ病スクリーニング

【目的】日常の精神科外来でのうつ病誤診回避を目的として Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D) の妥当性が検証され、その施行可能性の低さが報告されている。そこで、施行可能性の向上を目指し短縮・簡約化した10項目版CES-Dの妥当性が老年内科で検証された。しかし、まだ精神科外来での検証は受けていない。したがって、本研究の目的はこの2種類のCES-Dの試行可能性・信頼性・妥当性を比較することである。【方法】総合病院精神科外来を連続して受診した86人に対する横断研究を行った。【結果】10項目版CES-Dの方が20項目版CES-Dより施行可能性は高かった。一方、両者の内部一貫信頼性・妥当性はほぼ同等であった。【結論】精神科外来では10項目版CES-Dの方が20項目版CES-Dより施行可能性が高いため、使うのに適している。両質問紙の項目数よりも解答方式の違い(10項目版では「はい・いいえ」形式、20項目版は択一式)の方が施行可能性に

影響している可能性が高い。

2. Distribution of neurofibrillary tangles in diffuse neurofibrillary tangles with calcification

K. Ukai, H. Shibayama, R. Ishihara and N. Ozaki

「石灰化を伴う神経原線維変化病」における神経原線維変化の分布の検討

【目的】石灰化を伴う神経原線維変化病(DNTC)における神経原線維変化(NFT)の詳細な分布パターンを明らかにするために、6例のDNTC症例を、神経病理学的に調べ検討した。【方法】神経病理学的にDNTCと診断された6症例(男性2名と女性4名)におけるNFT分布を、ガリアス・ブランク銀染色法を用いて調査した。6症例の死亡時年齢は56歳から73歳で、平均64歳であった。【結果】NFTは大脑皮質全体に広がっており、特に側頭葉と辺縁系脳回に著明であった。辺縁系脳回でのNFTの分布パターンは、アルツハイマー病の分布パターンに類似していた。側頭葉においては、後方部よりも前方部により多くのNFTが分布しており、これは6症例全例で確認された。特に、側頭極では、ゴーストタングルを含んだ最も高密度のNFTが分布していた。【結果】大脑皮質において側頭極に最も高度な神経原線維変化が生じていることは、DNTCの神経病理学的な特徴として重要である。

3. Algorithm-guided treatment versus treatment as usual for major depression

A. Yoshino, T. Sawamura, N. Kobayashi, S. Kurauchi, A. Matsumoto and S. Nomura

うつ病のアルゴリズム治療：従来型治療との比較

【目的】4段階の治療戦略からなる大うつ病アルゴリズム治療と従来型治療の転帰を比較した。

【方法】対象は中等症以下の大うつ病外来患者210名。【結果】アルゴリズム治療と従来型治療による寛解率は60.2%、49.7%、寛解に要した期間の中央値は93日、191日であり、ハザード比は1.5であった。リチウム強化療法の実施率はそれぞれ20.5%、4.7%であり、強化療法実施率の差が寛解率の差につながっていた。【結論】中等症以下の大うつ病においては従来型治療よりもアルゴリズム治療が優れていることが示唆された。しかし、初期段階で寛解しなかった患者の大部分は脱落し、治療アルゴリズムの後半部分はほとんど活用されなかった。

4. Prevalence of i.v. thiopental use in psychiatric emergency settings in Japan

K. Hatta, M. Nakamura, K. Yoshida, H. Hamakawa, T. Wakejima, T. Nishimura, T. Kawabata, T. Hirata, C. Usui and Y. Sawa

日本の精神科救急現場におけるチオペンタール静注の使用頻度

【目的】チオペンタールなどバルビツール酸系薬剤の静注は無呼吸や気管支喘息患者の喉頭けいれんの危険性を孕むため、精神科救急現場においてその使用機会を減らす努力は重要である。われわれは高度救急の状況における鎮静の選択肢としてのチオペンタール静注の使用頻度を調べるため、多施設共同の横断研究を実施した。【方法】本研究は、7つの精神科救急部門で4ヶ月間にわたって実施された。対象はPANSS-EC 15点以上で静注による鎮静を受けた患者である。薬剤の選択は日本の治療指針に沿った。即ち、最初の注射はハロペリドールまたはベンゾジアゼピン系薬剤を臨床的必要性に応じて選択し、必要なら2回目の注射を逆パターンで投与した。ただし、最初の注射の後明らかに興奮が増悪して専門家がチオペンタールなしでは制御できないと判断した場合のみ、

チオペンタールを投与した。137名の患者が対象となった。平均年齢40.4歳 (SD 13.1)、男性48.9%、未治療29.9%、ICD-10のF2圏65.7%であった。【結果】2回目の注射としてチオペンタールを投与された患者は8.0% (11例)であった。その11例のいずれも、最初に投与されたのはハロペリドールでなくベンゾジアゼピン系薬剤であった ($p=0.0072$)。【結論】この多施設共同研究は疫学的デザインであるため、日本の精神科救急現場におけるチオペンタール静注の使用頻度は静注による鎮静の8.0%と考えられる。

5. Neural correlates of memory in depression measured by brain perfusion SPECT at rest

H. Azuma, K. Segawa, S. Nakaaki, Y. Murata, K. Kawakami, J. Tohyama, T. Iidaka, Y. Shinagawa, Y. Nakano, A. Yamada, N. Watanabe, J. Hongo, T. Akechi and T. A. Furukawa

うつ病患者の記憶と関連する脳血流部位

【目的】脳画像賦活研究によれば、うつ病患者において、記憶と前部帯状回、海馬は関連があると示唆されている。本研究の目的はWechsler Memory Scale-Revised (WMS-R) と single-photon emission computed tomography (SPECT) による脳血流との関連を調べること。【方法】17名のうつ病患者にHamilton Rating Scale for Depression (HAMD) と WMS-R を施行して、SPECT を撮像した。画像解析は statistical parametric mapping (SPM) を使用して、うつ病患者の特性で調整を行い、200 voxel の extent threshold で解析した。【結果】WMS-R の言語性記憶は右前部帯状回、視覚性記憶は左運動前野、一般的記憶は右前部帯状回、左運動前野の脳血流と逆相関した。HAMD は右前部帯状回の脳血流と相関した。【結論】前部帯状回の安静時脳血流はうつ病の重症度と WMS-R で測定された短期記憶との関連が示された。

(精神神経学雑誌編集委員会)